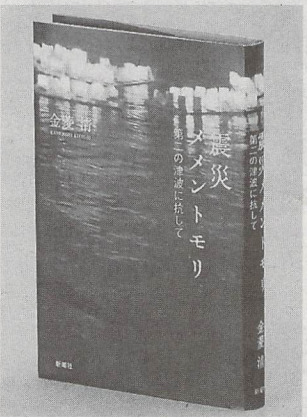


金菱 清 著



書を買っている。著者は、実践的かつ実証的な態度を崩さない。震災以前の被災地の状況を歴史的に踏まえつつ、地域共同体、祭り、偽りの産業振興といった問題を論じる。これらの営みと死者を語ることは矛盾しない。

また、被災者が精神の平安を取り戻すための具体的な方法として「書く」と(記録筆記法)に言及しているのは、きわめて意義深い。人は誰も自らを慰め、励まし、ときに救う言葉を、すでに内に秘めている。「書く」とは、それらの言葉を自分の中に発見する行為でもあるからだ。

著者が社会学者であるからといって、本書が書店の社会学の棚にだけ置かれるのであればもったいない。良書の多くがしばしば、分野を大きく架橋しているように、本書もまた、従来の区分けにはけっして収まらない。この本の内実は、震災の詩学というべきである。詩学とは、人間の魂のうめきに秘められた意味を、どこまでも追究しようとする態度をいう。

良書である。長く、真摯(しんし)な営みに裏打ちされた、希少な好著である。(新曜社・25902円)

かねびし・きよし 1975年大阪府生まれ、環境社会学者、東北学院大学教授。

死者と共に復興を語る

副題にもあるように、被災者は今、目には見えない「第二の津波」に脅かされている。状況を無視した法手続き、不条理な居住禁止地域の設定などをはじめとした行政の施策、亡くなった肉親の供養や行方不明者の搜索、そして、「まだ見ぬ子孫に対する命の責任」が、被災者に降りかかっている。

社会学者として被災地にあつて著者は、苦しむ人々を傍観し、観察したりはしない。解析する前に寄り添おうとする。遺族たちとの対話を繰り返しながら彼は、死者の存在を黙殺したままではもう、一歩も前に進めないとどこか来ていることを実感する。むしろ、死者の問題は遺族にとって最優先の問題だったことに気が付く。

ここでの「死者」は、遺体を意味しない。今も遺族と共にある「生きている死者」である。

震災は問題を生んだのではない。露呈したのである、という思いが本

評・若松 英輔 (批評家)